
君と僕の選択肢。

藤河昂示郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君と僕の選択肢。

【Zコード】

Z0183M

【作者名】

藤河昂示郎

【あらすじ】

カオスとカオスが混ざったらどうなるのか…。

答えは単純。

更なるカオスが現れるのだ。

…なんで俺がその中心にいるんだよつ…
心当たりがないぶん更にタチ悪いだろ…

ルーティカホイの謡（謡謡歌）

とつあえずのプロローグです。
内容はないよう？

すいません、ウザイですよね。
本編は次回からなんで内容はつづけられです。
キャラ達の雰囲気を読み取つて頂ければ幸いです

ドーカテオイの読

ふわふわ～ぐ

俺、柏 悠斗は困惑している。

今日2月14日は世の中の男共には特別な日だ。

悠斗にとつても別の意味でかなり意識せざるをえない日である。ちなみに悠斗は同学年の女子に興味はない。

それは年下の女子に変な感情を抱いたりする口利思考を持つているというわけじゃない。断言する。と、いうよりわかれ！（「わかる」の命令形）

正直な話をすれば悠斗には恋愛をするほど余裕がなかつた。

それに仕事上無理なんだよなあー

はあ～と溜息をつきながら一言。実は興味がなかつたりするはずがないんだ、これが。俺も立派な16歳の高1なんだ。多分。

そう嘆きながら学校への道を歩いて行く。

「あのー悠斗さんですよね？」

同じ制服を着た可愛らしい女子に声をかけられる。

「これ、よかつたら貰つてください」

彼女は可愛らしい仕草でキレイに包装された包みを差し出す。

「……ありがと」

小声で礼をいいながらぱりぱり可愛くラッピングされている箱を受け取る。

内心、ありがとつありがとつありがとつ。と土下座をしそうな勢いで喜び、その喜びも行き場を失い脳内爆発。実際にやつたら補導されるであろう危ない踊りを脳内で繰り広げ、結局治まらず爆発。でもそんなことを考えているなんて周りにいる人はわからないだろう。

悠斗は感情が顔にほとんど出ないのだ。

その顔のミリ単位の変化を読み取れるのは中学からの悪友（そんなかつこいいものではない。）ぐらいだ。親でさえ俺の考えがわかることはまずない。そのため悠斗は学校でクールなキャラで通っている。

そんな感情の暴走に「気づく」ともなくキャーと聞いて女の子は小走りで去つて行つた。

「ヤベエ。もうバツグに入んねえ。どうすつかなー」
バツグには先ほどのような可愛い包みが5つくらい入つていて。（もう一度に脳内爆発を起こしている。）

このままでは大惨事となつた去年よりもハイペースでチョコは増えていきそうだ。

去年のこの日は悲惨だった。

休み時間に20人くらいに囲まれ、誰のチョコを貰うの？と怖い笑顔でチョコを渡された。ちなみに全員知らない人だ。というよりまずは選ぶ理由をまず述べる。正直に言つと全部いらないぞ。と、言えるはずがない。

当然、選べるわけもなく少々パニックを起こした。結局とつた行動は全員のチョコを貰い平和に平等にね

行動実行。

……

あれ？なんだこれ？明らかに地雷を踏んだ空氣だ。
今までキャーキャーとうるさかった周りの女子の目が…
ヤバイ。なんか変なオーラみたいなのが周りに見える。
誰か助けて…

今にも泣き出しそうな悠斗（誰も気づいてない）が助けを求めて男子グループの方を見た。しかし完全に無視。つてか、なんかみんなさる顔が怖いですよ？

「あつ……」

気付くのが遅すぎた。

男子達のあの顔はそういうことだったのか。（比率的にはチョコ

貰いまくつてる方が確実に大。）

気付いた時には女子はなぜか豹変していた。な、何故だ。

女子はみんな引きつり気味の笑顔でチョコのアピール（このチョ「うんぬんカンヌン 理解できなかつた）と他人のチョコのけなし（そのチョコ…………じゃないの？笑 やつぱりわからない）言いだつた。

「こ、恐いいっ」

その中心に立つてゐる悠斗はあまりの恐怖に半放心状態。男子グループ（モテない同盟とやらのメンバーらしい）のざまあみろ、という微笑の横から一人男が近づいてきた。

「やつほ～。朝からハーレムはどんな気分かな～。」

別府だ。こいつはとにかくめんどくさい。だが逃げようにも周りをヒステリックガールズ（総勢約20人に囲まれていて動けない。

「ゆう～く～ん今日の約束覚えてる～？」

途端、女子が一斉に止まる。

あ、ああ。

この空氣を唯一抜け出せそうな別府がやつて來た。こいつに助けられるのか……と思う少し抵抗がある。何を要求されるのだろうか。そう考えているこの場を打破しだらう別府は近づいてくる。そして別府は俺の耳元でこう言つた。

「この間の可愛い子との「E・H・T（はあと）」

え？なんだそれ？と、思った瞬間周りの空氣が変わつた。何処を視ても力オスだ。

「そんなの聞いてないよ……」
「アレッシャー」という周りの声に圧倒される。

別府は「A T フィールド～」とかなんとか言つて腕をクロスさせスキップをするように去つて行つた。

「俺も知らねえよ。」

と小声で呟いた。ほほの距離にいる女子（という名の対人精神破壊ヒューマノイド）の顔がクツと変わる今度は何なんだ（泣）

悠斗もすでにヒステリック起こし気味だ。というよりもヒステリックを起こしていた。それに気づいたのは遠くでこっちを見て大爆笑しているあの野郎だけのようだ。

だが一線を越える瞬間には気づかなかつたようだ。頭の中で何かがはじけ飛ぶような音がした。

大声で笑い出した。女子達は本能的に悠斗から離れる。

「怖いよ。みんな怖いよう? そうだよねバレンタインだよね。みんなチョコ渡さなきゃねえ? でもさあ、もうバッグに入らないからさ

ククツと笑う悠斗は完全に目がいっている。別府雅樹は慌てて俺のそばに駆け寄ってきた。

…… それから俺は覚えてない。クラスの人たちはその後1か月くらい話を聞いてくれなかつた。俺は何をやつたのだろうか。別府は知らない方がいいと言つてゐる。

あえて説明するなら田の前に死神がやって来てお命頂戴的な感じで襲われたところを口ひとつ子美少女があなたを守るためにやって来ました、と言つて目の前で非日常バトルが始まる。

くらいのレベルでヤバかった。らしい。

それつてもうほとんどつていうか完全にありえない状況だろ。去年を思い出しながら率直に感想を述べたのが失敗だつた。これを聞いた別府は待つてましたと言わんばかりに語りだした。

遭遇頻度はかなり高いのだ。

「でもそんな出来事に遭遇してる人を知らないし聞いたこともない。」「ふつ、甘いな。狭い、世界が狭すぎるぞ。俺は3人位知ってるのさ。」

お前は何者だよ……

「ただの高校生だぜい。アニメをこよなく愛する…世界の味方。そ

う、別府雅樹だあつ！」

「うなると、こいつはとにかくめんどくさい。シカト決定な方向で。

「……。やめて。シカトはやめて。すじく虚しい感じになるからやめておくれ～～～」

「だからこの空気がダメなんだ～…………あれ？なんかこの空気が気持ちいい。やつたぞ。別府君レベルアップです！」

俺としてはただでさえめんどい、キモいこいつがM属性に目覚めるなんてごめんなんだけどな。というよりそれってマジでキモいぞ。

「はあ～悠斗の一言が体に沁みていく。悠斗、今夜俺の家に……」

ドスッと鈍い音が聞こえたと思つたら別府がその場に倒れ込む。そして俺は右手を強く握つている。無意識の内に俺自身がコイツを拒絶したようだ。きっと衝動的な殺人もこんな感じなのだろうか。背筋に悪寒が走る。きっとこのままでは別府を空の彼方へと送つてしまつだらう。無意識に。

別府、悪いがこれ以上俺に関わらないでくれ。そうしないと俺は将来刑務所ライフを満喫することになるだらう。

ドーカテオイの詩（後書き）

どうでしたか？

次回からはキャラ達にはマジで動いてもらいます
少しでも惹かれるところがあつたら次もお願いしますね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0183m/>

君と僕の選択肢。

2011年1月19日00時00分発行